

寄贈資料・新湊放生津町の矢疵阿弥陀如来像について

細木ひとみ

はじめに

令和2年(2020)11月、「明治期に岩嶺寺集落の宿坊家より譲られたと伝わる阿弥陀如来立像を大切に祀っていたが、今後散逸する可能性もあることから、立山博物館資料として大切に保管・活用して下さるならば関連資料とともにぜひ寄贈したい」との連絡があり、11月22日に大阪市の個人より銅造阿弥陀如来立像(写真1)と、厨子やイミテーションとみられる観音菩薩立像、書簡などの関連資料21点⁽¹⁾(写真2)が持ち込まれた。阿弥陀如来立像の姿や大きさは、当館の展示館2階で常設展示している「矢疵の阿弥陀如来立像」とも呼ばれる銅造阿弥陀如来立像(個人蔵、当館寄託資料)と類似しており、平成30年度前期特別企画展「験佛化現」⁽²⁾で「矢疵の阿弥陀如来像」と「立山開山縁起」が取り上げられたこともあって、すぐさま持ち込まれた阿弥陀如来立像の左胸を確認した。そうすると、左胸には2方向から2度にわたって傷つけられたとみられる痕があったのである(写真3)。

矢疵の阿弥陀如来については、『立山町史』上巻の美術・工芸の「立山にゆかりある県内の矢疵阿弥陀如来像」⁽³⁾に、「立山関係の仏像に矢疵の阿弥陀如来という小銅仏がある。右の胸に矢の当たった疵跡をあらわす穴をあけてあるのが特徴である」と記され、芦嶺寺相真坊の立山縁起(立山略縁起)から、

(上略) 遙か向ふの山頂に、古々たる松の木に、白鷹翼を垂れて遊び居るを御覧有せられ、ああ喜ばしや、彼の名鳥手に入れて、父の勘気を許し玉はれと、金鈴を以って招き玉へば、鷹は舞下り、有頼公の既に手に入れられむともし玉ふ時、此時幽谷俄かに揺動し、さも荒猛き大熊出合、勢尖く駆廻り、(中略)鷹は驚き翔きにける。尚若君見掛けて一散に裂かんばかりの勢に飛んで逆立つにくき敵の熊なるかなも、やにはに弓に箭をかけ切って放せば、誤まらず、かけ来る熊の月の輪に射深くに立にける。通常の熊なればその場に死するも、如来変化の熊なれば、血汐流し、箭を立てながら東南の方へ去る。鷹は彼の熊とともに天に地に翔きて登りける。(中略)立山の高峰に登る、ここに一個の窟あり、兼ねて尋る熊、鷹一度に此窟の中に入にける。(中略)嗚呼不思議なるかな、窟の内外光明輝々として六合に通れり。

有頼公驚き窟の内を窺へ玉へば、麓に於て熊に射玉へし箭は金色生身の胸に逆立ち、血汐染々と流るあり、鷹は則ち大聖世尊不動明王と現れ玉ふ。(下略)

の部分を抜粋して、「つぎの伝記を表現したものである」と紹介している。そして、県内に残っている矢疵の阿弥陀如来として、中田氏蔵(中新川郡上市町女川)、佐伯氏蔵(富山市米島)、大宝寺蔵(新湊市海老江)、立山講社蔵(氷見市論田)、池内氏蔵(婦負郡婦中町中島)、吉野クニ氏蔵(婦中町河原町)、五十嵐精一氏(富山市愛宕)の7軀を挙げ、写真とともに紹介しているのである。

大阪市の個人が所蔵する銅造阿弥陀如来立像も、左胸に「矢疵」に見立てられたとみられる痕があることから立山信仰独特の「矢疵の阿弥陀如来像」の一つと考えられる。しかし、この銅造阿弥陀如来立像についてこれまでに展示や本などで紹介された形跡はない。そこで、本稿では本資料を立山信仰ゆかりの「新出資料の像」として由来などを紹介するとともに、この像の持つ意味なども検討したいと思う⁽⁴⁾。

1. 矢疵の阿弥陀如来像と立山開山縁起

「立山開山縁起」において立山開山者である佐伯有頼が矢を射った熊が実は阿弥陀如来であったという話に基づき、「立山権現=矢疵がある阿弥陀如来」と考えられている。「はじめに」でも紹介した、平成30年

度前期特別企画展「験佛化現」では、銅造阿弥陀如来立像6軀（①～⑥）、木造阿弥陀如来立像1軀（⑦）が展示され、『立山町史』上巻で紹介されているものの所在がわからなかった2軀（⑧・⑨）についても触れている。これらについては同展覧会の展示解説書⁽⁵⁾に詳しく記されており、展示担当者であった加藤基樹氏が「立山権現[矢疵阿弥陀如来]の史料的考察—立山信仰と生身仏信仰—」⁽⁶⁾でも論じているが、まずは現在までに把握している矢疵の阿弥陀如来像を整理して紹介したい。

まずは、「験佛化現」展で展示した矢疵の阿弥陀如来像は以下の7軀である（下記の紹介順は、『立山町史』上巻の掲載順をもとにしている）。

- ①個人蔵（千葉県・立山博物館寄託資料、室町時代、銅造）
- ②大宝寺蔵（射水市海老江、江戸時代、銅造）
- ③論田自治会蔵（氷見市、江戸時代、銅造、氷見市指定文化財）
- ④個人蔵（富山市婦中町、江戸時代、銅造）
- ⑤個人蔵（富山市愛宕町、江戸時代、銅造）
- ⑥林證寺蔵（愛知県北名古屋市、室町時代、銅造、北名古屋市指定文化財）
- ⑦見付来迎寺蔵（富山市梅沢町、江戸時代、木造）

①の個人蔵は、「はじめに」でも紹介した立山博物館展示館2階で常設展示している銅造阿弥陀如来立像（写真4）で、『立山町史』上巻に「富山市米島 佐伯氏蔵」と記されているものである。昭和22年6月24日発行の富山新聞には、「百五十年ぶり世に出る、佐伯家に秘められた『立山権現』」と題して以下のように紹介されている。

この立山権現を一家八代にわたつて守り通して来たのは立山芦嶽の佐伯一族の流れをくむ富山市豊田稜下犬島の素封家佐伯氏（当主佐伯敬之君＝富山中学三年）で阿彌陀像は明治十年から四代前の佐伯兵右衛門氏によつて間口二間の大佛壇の奥深く蔵されてあつた、（中略）代々「他言は無用、佐伯一族にかわつて御奉公せよ、立山御本尊をあつくおもりせよ」と伝えられていた

というのである。さらに同記事には、

この阿彌陀像には秘密をまもるため当時を説明する一切の書類はないが佛像をくるんだ布地に光格天皇御宇にあたる享和三年三月「諸佛救世者住於大神奉掛御戸帳為説衆生放現無量神力為密泡童女施主永泉坊」と書かれてあり（永泉坊は岩嶽にある立山寺の末寺で四年前死去した文学博士佐伯有義氏の家である）永泉坊住職自らわが子のぼだいをとむろう寄進の御戸帳布施であり立山権現佛像であることを物語つている

と記されており、佐伯敬之氏所蔵の銅造阿弥陀如来立像と岩嶽寺宿坊家の永泉坊との関わりがうかがえる。実際、銅造阿弥陀如来立像と一緒に、記事にある布地が当館に寄託されており⁽⁷⁾、「奉掛御戸帳」の墨書からこの布が御開帳時に掛けられたものであること、享和3年（1803）3月に永泉坊が施主として寄進されたことがわかる（写真5）。

②の射水市の大宝寺所蔵の銅造阿弥陀如来立像については、由来などは不明であるが、立山由来の銅造十王坐像（閻魔坐像）も所蔵されていることから、明治期の廃仏毀釈の影響で移されたものと考えられる。

③の論田自治会蔵については、『立山町史』上巻に「氷見市論田 立山講社蔵」と記されている。論田集落には、現在も「立山権現講」と呼ばれる講があり、2月と10月に地区内の光伝寺と願正寺両寺の住職を招いて執り行われている。そして、この銅造阿弥陀如来立像については『氷見市史』の民俗編⁽⁸⁾に、

明治一〇年（1877）二月、藤箕の行商に出向いた論田の坂下甚三郎（光伝寺門徒、坂下純司の曾祖父）が、立山山麓岩嶽寺村二十四坊の一つ明星坊（佐伯佐茂里宅）に一泊した際に譲り受けた「矢疵の阿弥陀如来」を祀るものであるが、この講の母体は論田の「ムラお講」である。（中略）立山仏はこの講に迎え入れられて併修されたものである。

と記されており、岩嶽寺の明星坊（佐伯左茂里宅）から譲り受けたことがわかる。元は、明星坊の本尊として安置されていたが、「立山縁起」とともに譲り受けたとみられ、譲り受けた際の「譲渡証」も現存している。また、阿弥陀如来像の蓮台には、「御蓮台／奉寄進／當所／坂下宇左エ門／戸津宮村／藤岡庄治郎／明治拾丑年五月之出来」という墨書もある⁽⁹⁾。

④の個人蔵と⑤の個人蔵は、『立山町史』上巻にそれぞれ「婦中町河原町 吉野クニ氏蔵」、「富山市愛宕五十嵐精一氏」と記されているもので、現在もそれぞれの関係者が所蔵している。⑤の銅造阿弥陀如来立像の由来は不明であるが、④の銅造阿弥陀如来立像については「寛永元年（1624）牛ヶ首用水創設時に出土」と伝えられている。

⑥の愛知県北名古屋市の林證寺は、近くにある松林寺とともに、明治期の廃仏毀釈により立山山中に安置されていた仏像群が伝わっている寺院である⁽¹⁰⁾。⑥の銅造阿弥陀如来立像はそのうちの1体で、浄土山の元本尊であった「三国伝来阿弥陀三尊像の中尊」という。松林寺にも「立山元本社本尊」とされる銅造阿弥陀如来立像が伝わっているが、左胸には穴が空いていない。両寺に伝わる立山山中の仏像は隔年で御開帳されており、林證寺蔵の「開帳案内」の写真からは⑥の矢疵がある阿弥陀如来立像を「三国伝来金銅像／立山元本社本尊阿弥陀如来」と紹介していること、林證寺蔵の「立山大権現縁起拝読文」では矢疵の阿弥陀如来立像を「立山大権現」として開帳していたことがうかがえることから、矢疵のある銅造阿弥陀立像が御本社の本尊であった可能性もある。

⑦は唯一の木造で、富山市梅沢町にある光明山攝取院来迎寺（見付来迎寺）蔵の矢疵の阿弥陀如来立像である。見付来迎寺は立山ゆかりの寺院の一つで、「越中宝鑑」⁽¹¹⁾によると、大宝2年（702）に佐伯有頼が出家して慈興と称して立山の麓に五智山円福寺を創建、久寿2年（1155）には円福寺僧・林海が立山権現のお告げによって婦負郡萩島（現在の富山市婦中町萩島）に移転し、この時に「光明山来迎寺」と称して浄土宗に転じたという⁽¹²⁾。『自他国寶物并法談願日記』⁽¹³⁾からは、天保14年（1843）に能登七尾の宝幢寺（浄土宗、石川県七尾市）と宇出津の天徳寺（浄土宗、石川県鳳珠郡能登町）で開帳を実施していることがうかがえ、その際に開帳された「立山大権現本地阿弥陀如来」がこの像だと考えられる⁽¹⁴⁾。

「験佛化現」展で展示した、以上の7軀の像の他に、『立山町史』上巻で写真とともに紹介されているのが、婦中町（現在は、富山市婦中町）の池内氏蔵（⑧）と上市町の中田氏蔵（⑨）の銅造阿弥陀如来立像である。「験佛化現」展の開催前に、この2軀についても所在を確認したが、行方がわからなかったために現在も未見である。ただし、⑥の林證寺蔵と⑦の見付来迎寺蔵の銅造阿弥陀如来立像については『立山町史』上巻には記されていないことから、昭和50年代にはまだ知られていなかったようである。

そして、この9軀の他に、『立山町史』上巻の別のページに、「矢疵の阿弥陀」として岩嶽寺玉林坊の阿弥陀如来坐像も紹介されている⁽¹⁵⁾。

岩嶽寺玉林坊に伝わる阿弥陀如来坐像は、鎌倉末から南北朝ごろに鑄造されたものと推定されるが、とくに台座の様式がこれを示している。仏体は前半部よりないから、これももとは懸仏（御正体）であった。この像の変わっていることは右胸に小さい穴のあいていることで、「矢疵^{やきず}の阿弥陀」といわれている。と記されており、①～⑨の像とは違って「もとは懸仏（御正体）であった」が、この阿弥陀如来坐像にも右胸に穴があるために「矢疵の阿弥陀」とされているようである。玉林坊の阿弥陀如来像は、現在も岩嶽寺の旧玉林坊宅の祭壇に祀られている（⑩、写真6・7）。確かに、像の左胸に「矢疵」とみられる、直径0.5cmくらいの穴が空いている。しかし、「仏体は前半部よりない」と記されているが、後半部（背面）もあり、「もとは懸仏（御正体）であった」は書き間違いのようである。像高20.2cm、裾張（最大幅）14.2cm、最大奥行9.5cmの坐像で、左手首がなく、背面には光背が取り付けられていたと考えられる柄（ほぞ）がある。

さらに、令和3年2月に受けた矢疵の阿弥陀如来立像についての取材中、北日本新聞社の記者より北日本新聞社発行の平成11年（1999）6月19日付朝刊に「八尾勝福寺で矢疵阿弥陀如来像の木造座像が県内で初めて確認された」という記事があることを教えていただいた。現在も富山市八尾町の勝福寺に安置されてお

り、像高 52.0cm の木造阿弥陀如来坐像（最大幅 45.0cm・最大奥行 36.0cm、⑩、写真 8・9）の左胸に最大 1.2cm の穴が空いている。墨書などはなく、詳しい伝来は不明であるが、記事には「確認された像は高岡市の旧家から最近、同寺に安置された」と記されている。この像も、やはり「矢疵の阿弥陀如来像」の一つであったと考えられる。

以上のように、「矢疵」のある阿弥陀如来像のうち、未見のものも含めて銅造で立像のものが 8 軀(①～⑥、⑧、⑨)、銅造で坐像のものが 1 軀 (⑩) ある。また、木造では立像が 1 軀 (⑦)、坐像が 1 軀 (⑪) で、これらの 11 軀と次に紹介する銅造阿弥陀如来立像 1 軀 (⑫) の、合わせて 12 軀を現在確認しているのである (表 1)。

2. 新出の矢疵阿弥陀如来像とは

本稿で特に紹介したいのが、「新出」と考えられる大阪市の個人が所蔵していた銅造阿弥陀如来立像 (⑫) である。この阿弥陀如来立像は、「はじめに」でも述べたように、令和 2 年 12 月に正式に寄贈され、令和 4 年 7 月から立山博物館展示館において常設展示している像である。

旧所蔵者によると、新湊市（現在は射水市）放生津町の「板坂家」で祀られていたもので「明治期に岩嶮寺の宿坊家から譲られた」との伝承があるものの、譲ってくれた宿坊家についてはわからないという。旧所蔵者が子供の頃には、阿弥陀如来立像を仏壇で祀っており、40 年ほど前（1980 年代か）に両親が放生津を離れて射水市の太閤山へ移った際にも、平成 23 年頃に太閤山の家を処分した際にも、この阿弥陀如来立像は大切に祀っていたのである⁽¹⁶⁾。像は、像高 37.2cm、肩衣張（最大幅）13.0cm、裾張 12.4cm、重さ 4.55kg の立像で、鋳銅一鑄、表面に鍍金がのこる像である（写真 1）。

令和 2 年 11 月 28 日、富山考古学会の「越中の（小）金銅仏調査」で県内の金銅仏調査を行っていた西井龍儀氏（富山考古学会）に協力いただき、銅造阿弥陀如来立像の構造や法量、像容などを確認したところ、姿や大きさなどは千葉県個人蔵の銅造阿弥陀如来立像 (①) や愛知県北名古屋市の林證寺蔵の銅造阿弥陀如来立像 (⑥) と共通するところがあった。しかし、白毫がなく、掌がやや小さいことなど、細部にいくつか違いが見られた。また、像背面には、光背取り付け用の柄が後頭部と背中との 2ヶ所にある（写真 10）。さらに、肝心の矢疵の穴も、先述した 2 軀 (①、⑥) の胸の疵は丸く成形されているのに比べ、2 方向から 2 度にわたって傷がつけて「矢疵」としているようであり、形が不整形であること点でも異なっている。これらのことから、鑄造時期は不明であるが、他の矢疵の阿弥陀如来立像と比較するとほぼ同時期と考えられ、室町時代のものと推定された（写真 11）。

この銅造阿弥陀如来立像が寄贈される際、一緒に寄贈していただいた関連資料の中に「阿弥陀如来由来書」⁽¹⁷⁾（写真 12）があり、以下のように記されている。

おが たてまつ たてやまじょう どさん
 拝み奉るは 立山浄土山の
 ほんぞん
 本尊なり
 こ ゆらい たいほうがんねん
 此の由来をたづぬるに 大宝元年
 さいきありよりきょう
 佐伯有頼卿 やまへらく
 じごく いっさい ひと みちび た
 地獄あり 一切の人を導びく為め
 ぎょうぎ ぼざつ おんざく あみだ
 行基菩薩の御作 阿弥陀
 によらい たてまつ たてやま こころ あらた
 如来を奉るなり 立山とは心を改め
 たてかへるを以て名づく
 めいじ がんねん てんのうしんぶつぶんりつ
 明治元年に天皇神佛分立なし
 たまへ
 どうにねん はちがつえんいん
 全二年 八月縁因ありて
 ほうじょうづまち いたさかけ あんち
 放生津町 板坂家に安置す

ねんぶつ
念佛もろともに禮拝すべき
なり

この由来書によると、立山浄土山の御本尊であった阿弥陀如来像（行基菩薩作）を明治2年8月に縁因あって「放生津町板坂家」へ安置することになったと記されている。この「板坂家」とは旧所蔵者の父方の家であり、商号を「いたや」といって昔は廻船問屋をしていたと聞いているという。由来書には「矢疵」がある阿弥陀如来とは記されていないが、旧所蔵者（板坂家）の伝え聞いている話と併せて考えると、ここで記されている「阿弥陀如来像」がこのたび寄贈された矢疵の阿弥陀如来立像とみられる。そして、「立山浄土山の本尊」とする点では、林證寺蔵の阿弥陀如来立像（⑥）の伝承と同じである。それにしても、新湊の放生津で廻船問屋していた板坂家がなぜ譲り受けたのか、その理由は不明のままである。

現在は譲ったほうである「岩嶽寺宿坊家」と「板坂家」との関係も伝わっていないが、関連資料の中には岩嶽寺宿坊家である「実相坊」からの書簡⁽¹⁸⁾があった（下線は加筆、写真13）。

任幸便、一筆啓上仕候、以先、其御地御家内皆々様、益御機嫌能被為遊御座、珍重之御儀ニ奉賀候、随而我共儀無事に罷暮し居申候間、御安意可被下候、然者先達而立山御参拝之砌、御苦勞千萬ニ奉存候、且八月廿二日出之御紙面忝拜見仕候、其節御咄シ之佛様御覓之次第、母様に示談仕候處、御公様之事故、家内一統罷知仕候間、近々御越被下度、左候得ハ右佛様御ゆづり申候間、左様思召可被下候、先ハ乱筆御免被下、此如ニ御座候、以上。

寅九月一日 岩倉実相坊
板坂亦平様

これは「板坂亦平」が岩嶽寺の実相坊からもらった手紙である。富山大学人文学部の鈴木景二教授の解説によると、「板坂亦平」が寅年の夏に立山に参拝した際に「仏像」を欲しいと話して帰り、さらに8月22日付の手紙を出して具体的な要請をしたようである。そこで、このことを実相坊が母様（一家の長老的存在か）に相談したところ、「什物のことだから関係者が認識（承認）するべきであり、近いうちにお越しいただきたい。そうすれば仏様をお譲りします」と伝えてきたのである。つまり、この手紙にある「仏像」が何を指しているのかは不明であるが、板坂亦平が立山参拝時に岩嶽寺実相坊と関わりがあり、仏像を譲渡する交渉が出来る関係であったことは窺える。また、「板坂亦平」がどのような人物かもこの書簡が書かれた年もわからないが、「寅九月一日」が明治2年より前ならば慶応2年（1866）の丙寅とも考えられ⁽¹⁹⁾、そうなると、仏像を譲ってほしい板坂家との話の中で明治期の廃仏毀釈が影響し、実相坊の什物であった銅造阿弥陀如来立像が譲ってもらえた可能性もあろう。

ともかく、岩嶽寺実相坊から「仏像」＝銅造阿弥陀如来立像（矢疵の阿弥陀如来立像）が譲渡されたかどうかの判断は推測の域をでないが、板坂家に「銅造阿弥陀如来立像が岩嶽寺の宿坊家から譲られた」と伝わること、板坂家と岩嶽寺実相坊に立山参拝において関係があったこと、岩嶽寺実相坊から板坂亦平宛の手紙が板坂家の仏壇で銅造阿弥陀如来立像とともに大切に保管されていたことなどの理由から、岩嶽寺実相坊から板坂家へ銅造阿弥陀如来立像が譲られたと考えて良いように思える。

3. 岩嶽寺実相坊と立山登拝者

次に、新湊放生津町の板坂家と関係があったと考えられる岩嶽寺の実相坊について見ていきたい。

岩嶽寺の雄山神社前立社壇（岩嶽寺雄山神社）が所蔵する「越中立山岩嶽寺古文書」（富山県指定文化財）の中に天正11年（1583）8月20日の「佐々成政寺領寄進状」⁽²⁰⁾があり、

立山権現勤行無懈怠之旨、被申越之通承届候。弥不可有油断候。就中立山之儀、従神代依無其陰、諸堂

建立并祭禮、如先規可被入精之趣、貳拾参人之請判、得其意候。就其為新寄進、以岩倉内参百俵、以寺田之内百五拾俵、合四百五拾俵分、不可有異儀候。若堂塔・橋以下太破(ママ)二付而者可不相届之旨、急度可申出候。仍如件。

佐々内藏助
成政 (花押)

天正拾壹年八月廿日

(延命院) 院主御坊	圓林坊
長吏御坊	花藏坊
千光坊	財知坊
常住坊	明静坊
惣持坊	多賀坊
藏塩坊 <small>(生)</small>	無動坊
白蓮坊	玉林坊
	蓬門坊
	楞嚴坊
	中道坊
	覺乗坊
	蜜藏坊
	玉藏坊
	<u>実相坊</u>
	一乗坊
	六角院

已上貳拾参人

と記されている（下線は加筆）。これは、立山寺（岩嶽寺）衆徒23人の請によって佐々成政が立山権現の堂舎や祭礼を復興し、岩倉及び寺田に450表の地を寄進した書状であるが、そのうちの1人として「実相坊」の名前が記されている。また、貞享3年（1868）の「立山寄附券記」にも岩嶽寺宿坊家24坊が記され、黒印が押されているが、そこにも「實相坊」の名が見える。実相坊は、早くから岩嶽寺の宿坊の一つであったことが窺えるのである。

さらに、岩嶽寺の宿坊家は、立山寺の前を南に延びていた立山往来道に沿って、一段低く常願寺川縁近くに9坊（谷の坊立）と段丘崖の縁に街村状に15坊（峯の坊立）にわかれて林立していたというが、岩嶽寺の雄山神社前立社壇が所蔵する絵図類35点を見ると、天保6年（1835）・7年（1836）ごろの状況を記した「岩嶽寺同坊中寄進地等見取絵図」⁽²¹⁾や天保8年（1837）ごろの状況を記した「岩嶽寺神領地全図」⁽²²⁾には、西側を流れる常願寺川と立山往来道の間に沿って宿坊が建ち並んで描かれており、実相坊はその中の一番南にある玉藏坊の隣に位置している。安政5年（1858）の飛越地震によって発生した土石流により、立山寺（岩嶽寺）境内の一部とともに「谷の坊立」（9坊）が流されており、その流失坊家の移転状況などを記した絵図「岩嶽寺同坊中等敷地震災流失箇所見取絵図」⁽²³⁾にも、実相坊は先の絵図とほぼ同位置に描かれている。

他には、東京都新宿区にある昇龍山観音庵所蔵の卷子「立山参詣記」⁽²⁴⁾に岩嶽寺の別当として「実相坊」が登場する。この資料は、放生津の行年23歳の佛山禅苗（禅苗禅師）が、行年16歳の亀次郎とともに天保2年（1831）6月20日から29日にかけて立山を参詣した際の様子を記したもので、冒頭には以下のようにある（下線は加筆）。

同廿日、越中州放生津新町従井波屋源太郎方、暁天ニ発足し、同中町牧屋仁兵衛宅へ立寄、随童亀治郎連

祖父川六良兵衛并ニ亀治郎ノ親共、同所鎮守八幡社之松原之端にて見届ニ送、早朝より七ツ時前ニ九り行、立山之麓岩嶽寺へ参禮拜いたし候間ニ、百姓躰之者壹人来、尋而問、御兩人様方ハ御山へ御参詣被遊候歟と相尋□（るカ）、左様ニ候と答れハ、彼者神妙ニ岩嶽寺之由来を説き、難有神感徹肝、拝禮し、畢て別当之内実相坊へ案内為致、坊主へ対面いたし、兩人共ハ放生津産之者ニ而候、此度志願有之候而、御山廻参仕度よろしき様ニ御案内願度御座候と申候得ハ、委しく参詣之次第を咄し、中雇ハ先刻之案内之者、宮路村徳三郎と申、行年十九才、則此者を為案内之に頼、休息之間ニ飲物ノ仕度白米七升、味噌香ノ物梅干砂糖等色々調揃ひ、此晩ハ是ハ芦嶽寺之別当まで参度と挨拶致、中雇召連、御山之旧路由来順次ニ案内致させ、三り行、芦嶽寺別当に着き、郷里奈呉町の者九人、先着し居、互に挨拶のべ、同宿仕、明日廿二日ハ曇天早朝七ツ時ニ出足、芦嶽寺帝釈堂并ニ宇婆堂へ参詣し（以下、略）

放生津新町の井波屋源太郎⁽²⁵⁾方を出発し、放生津中町の牧屋仁兵衛⁽²⁶⁾宅へ立ち寄って、随童として亀治郎を連れ、鎮守である八幡社（放生津八幡宮）の松原の端にて見送られた佛山禅苗は、岩嶽寺へと参詣する。そこで、百姓のような者（宮路村の徳三郎）に「立山へ参詣されるのか」と尋ねられて、「そうだ」と答えると、その後、別当である実相坊へと案内されており、佛山禅苗は立山での参詣についてのことを頼んでいるのである。さらに、立山から山麓へと戻ってきた際にも、「岩嶽寺別當實相坊一宿」とあって実相坊に一泊している。

さらに、佛山禅苗の立山参詣と関係するのかわからないが、岩嶽寺の実相坊と放生津の人々との関係が窺えるのが、栃木県立文書館に寄託されている大島延次郎家文書の明治5年「止宿人員調理帳」である⁽²⁷⁾。これは、明治5年（1872）に立山登拝をした人のうち、新暦で7月10日から8月27日までの期間に岩嶽寺で宿泊した人数のみを示す帳面で、左治馬（実相坊）へ放生津から「6月10日に12人」、「6月17日に7人」、「6月22日に35人」、「7月朔日に10人」が宿泊していることがわかる。

岩嶽寺の宿坊は、正徳元年（1711）以降、加賀藩によって立山山中における宗教的諸権利を得て、「別当」として諸堂舎の管理も任せられていた。つまり、実相坊も岩嶽寺の別当の一坊として、立山山中の諸堂の管理を行い、立山への参詣者（登拝者）とも関わりを持っていたということである。そして、それは明治期になっても続いており、放生津の人々も宿泊しているのが窺えるのである。

おわりに

本稿は、令和2年12月に立山博物館に寄贈された新湊放生津町の銅造阿弥陀如来立像を中心に、矢疵の阿弥陀如来像について新たに調査してわかったことも含めて改めて紹介したものである。

寄贈された阿弥陀如来立像は、新湊放生津町の「板坂家」で祀られていたもので「明治期に岩嶽寺の宿坊家から譲られた」との伝承がある像であった。左胸に2方向から2度にわたってつけられた「矢疵」があり、一緒に寄贈された「阿弥陀如来由来書」にも浄土山の御本尊であった阿弥陀如来像（行基菩薩作）を明治2年8月に縁因あって「放生津町板坂家」へ安置することになったと記されていた。

その中で、この矢疵の阿弥陀如来立像を浄土山の御本尊として祀り、板坂家に譲渡した岩嶽寺の宿坊家とはどこであったのかという疑問が残る。これについて、旧所蔵者には譲渡した岩嶽寺宿坊家については何も伝わっていないものの、同じく寄贈された「岩嶽寺実相坊」からの書簡（手紙）も一緒に保管されていたのである。いつ頃の手紙かははっきりしないが、この手紙から板坂家と岩嶽寺実相坊が立山参拝において関係があったこと、板坂家に「仏様＝仏像」を譲ってほしいとお願いしていたことが窺え、他の宿坊家との関係が見当たらないことなどの理由から、この矢疵の阿弥陀如来立像は岩嶽寺実相坊から板坂家へ譲られた可能性が高い。

また、矢疵の阿弥陀如来像については、『立山町史』上巻⁽²⁸⁾に当時確認されていた①～⑤と⑧、⑨の矢疵

の阿弥陀如来像から、

矢疵の阿弥陀は、芦峯の坊の人たちが檀那廻りをするとき、四幅の立山縁起曼荼羅とともに持っているといわれているが疑わしい。この像は、芦峯・岩峯の坊からは一躯も発見されていない。現在も所有者は個人かまたは講である。それに重さも数キログラムを越すものもあって、交通不便な時代にそれを持ち運んだと考えがたい。おそらく立山を遠く離れた地域で、立山信仰にもとづいて造顕されたものと思われる。(中略)

矢疵の阿弥陀如来は銅造で、髪は螺髪ではなく、つるりとしたものが多い。顔は仏像のように威厳はなく、少年のような清純な表現になっている。鑄造の技法は全体を一度に鑄たもので、鎌倉時代のように胴体と腕を別々に鑄るようなことはしていない。室町時代から桃山時代にかけて造顕されたらしくはなはだ重いのが特徴である。おそらく地元で造顕されたものであろう。

と紹介されている。ここにあるように、確かに銅造で重いため、立山曼荼羅と共に持ち歩いたとは考えられない。しかし、「芦峯・岩峯の坊からは一躯も発見されていない」とあるものの、現在確認している矢疵の阿弥陀如来立像12躯のうち、岩峯寺実相坊と関わりのあった板坂家の像も含めて岩峯寺宿坊家と関係する像が4躯ある(①、③、⑩、⑫)。そのうち、『立山町史』上巻になぜか「もとは懸仏(御正体)であった」と記された岩峯寺玉林坊の阿弥陀如来坐像(⑩)を除けば、3躯が銅造の矢疵の阿弥陀如来立像である。つまり、芦峯寺宿坊家ではなく、正徳元年(1711)以降、加賀藩によって立山山中における宗教的諸権利を得て、「別当」として諸堂舎の管理も任せられた岩峯寺の宿坊家が祀っていたのが矢疵の阿弥陀如来像＝立山権現であったようである⁽²⁹⁾。それでも、それぞれの宿坊家で祀っていた像なのか、立山山中で祀っていた像なのかは解明されておらず、今後の研究課題でもある。

そうした中、今回、立山開山縁起に基づいた、立山信仰独特の「矢疵の阿弥陀如来像」が新たに発見され、寄贈されたことは大変嬉しく、これからの「矢疵の阿弥陀如来像」の調査研究の貴重な資料として、また一手掛かりを得ることが出来たのである。

また、今回新たに調査することが出来た岩峯寺玉林坊の銅造阿弥陀如来坐像や、高岡市の旧家から八尾の勝福寺に安置された木造阿弥陀如来坐像など、他にも由来のわからない像や後から「矢疵」をつけたと考えられる像があることから、岩峯寺宿坊家の宗教的活動などとともに今後も調査していきたいと思う。

【附記】

本稿作成にあたりまして、佐伯孝元様と藤島秀恵様(勝福寺副住職)には大変お世話になりました。また、富山大学人文学部の鈴木景二先生と射水市新湊博物館の松山充宏学芸員、「験佛化現」展の担当者であった加藤基樹氏には沢山の貴重な意見をいただきました。

ここに記して、皆様に御礼申し上げます。

【註】

(1) 銅造阿弥陀如来立像と共に寄贈された、関連資料と考えられる21点とは次のものである。

①厨子

最大幅23.4cm、高さ46.5cm、奥行19.0cm、扉全開最大幅約45.5cm

木製、黒塗り、観音開き扉。扉の金具は外れている。中は全体に金箔が貼られており、扉を開くと向かって左に合掌印の勢至菩薩、右に蓮華を持つ観音菩薩が描かれた紙(金泥カ)が貼り付けられている。銅造阿弥陀如来立像が入っていたものと考えられるが、詳細は不明。ただし、岩峯寺の宿坊家から譲られた際にこの厨子に入れられていた可能性もある。板坂家では、小さい銅造聖観音菩薩立像(資料②)を入れて祀っていたという。

②銅造聖観音菩薩立像

像高12.1cm、最大幅(光背幅)3.7cm、重さ98.5g

宝冠に化仏立像を戴き、右手には蓮華、左手には水瓶を持ち、蓮華座に直立する。像背面はなく、蓮華座のみある。どのような像かは伝承がなく、不明。

③阿弥陀如来由来書

長さ28.0cm、幅（最大）40.0cm、一紙

立山浄土山の御本尊であった阿弥陀如来像（行基菩薩作）を明治2年8月に縁因あって放生津町板坂家へ安置することになったことを記したものの。宛先や年号などはなし。

④仏説阿弥陀経

継ぎ合わせた箇所からはがれたものが3枚あり。巻かれてビニール袋入り。

⑤釈迦之経

木箱：縦24.5cm、横10.2cm、高さ（蓋あり）3.2cm・（蓋なし）2.6cm

木箱の蓋に「釋迦之経」、蓋裏に「板坂家」と墨書あり。中には、葉3枚（多羅葉カ）と貝葉（ヤシの葉にかかれたお経）が入っている。※資料⑥も同じ箱に入っていた。

⑥書簡

「板坂亦平様」宛に「岩倉実相坊」より「寅九月一日」（年は不明）に出された書簡（便り）。2枚に破れている。縦17.1cm・横22.5cmの包み紙にも「寅九月一日認メ」「新湊放生津中町／板坂亦平様 岩倉実相坊」とある。

⑦御印章

「御印章」と印刷された袋に2枚の受領書が入っていた。袋は縦24.3cm、横10.2cm。

受領書1：縦19.3cm、横44.5cm

「板坂久次郎殿」宛の勝興寺事務所発行の受領証（釈尼妙俊の祠堂 金五円、昭和9年5月14日付）。

受領書2：縦（最大）19.6cm、横26.8cm

「板坂久次郎殿」宛の勝興寺志納所発行の骨煉太子像建立祠堂金受領証（明治7年5月27日釈尼妙俊のため、金一円、昭和8年5月14日付）。

⑧受領証

縦17.8cm、横18.2cm

「高岡教区八組円楽寺門徒 板坂キク殿」宛の真宗大谷派宗務所出納部発行の受領証（金 参千弍百円、昭和43年5月27日付）。

⑨立山温泉薬師如来縁起の写

3枚にわかれているが貼り合わせたような跡はなし。立山温泉薬師如来縁起について、「明治38年10月6日朝早く出発するところ雨天のためはんたし（販出カ）する事をあたわず記ねんとしてこれをうつすとあり」、「昭和4年2月1日朝早上瀧町に行商の記年としてこれをうつす」、「板坂きく」と記されている。明治38年に立山温泉薬師如来縁起を写し、さらに昭和4年にも写したものと考えられる（続きか）。

⑩東本願寺発行リーフレット

縦15.5cm、ヨコ21.2cm

二つ折り、両面印刷。「御尊の奉安とそのお給仕に就て」とある。

⑪月牌証状

縦32.5cm、横46.0cm／包み紙は縦39.0cm、横（最大）27.4cm

「板坂又平殿」宛（富山県射水郡坂野村（カ）、大正7年4月16日付）の善光寺寺務職大本願上人執事の月牌証状（板坂家先祖代々のため金壱円寄附）。射水郡坂野村は不明。大本願は浄土宗。包み紙に、「取次／ゆうつや（カ）」とある。

⑫法然上人一枚起請文の写

縦23.1cm、横34.3cm

「建曆二年正月廿三日 源空御判」の一枚起請文の写し。

⑬安居院聖覚聖教の写

縦23.5cm、横35.2cm

「承久三歳仲秋中旬 第四日 安居院ノ法印聖覚作」の写し。縦罫線入りの紙に書かれている。

⑭袈裟曼陀羅

縦32.0cm、横41.2cm／袋は縦16.0cm、横8.5cm

袋に「袈裟曼陀羅」の判と丸い朱印あり。中には、木版刷りの曼陀羅1枚。

⑮嫁威肉附之面由来ほか

縦23.8cm、横17.0cm

和綴本の一部か。途中から欠損（3枚、6ページのみ）。「嫁威肉附之面由来」は、蓮如上人ゆかりの伝説。

⑯絵本太閤記

縦22.5cm、横16.0cm、和綴本

題箋には「繪本太閤記 三編六」とあり、背表紙にも墨書があるものの判読できず。紙のカバーの表紙に「安土宗論之巻」、背表紙に「板坂所有」と墨書あり。

⑰一國三十三番札所の御朱印帳

縦25.0cm、横18.3cm（表紙で計測、はみ出している部分あり）

表紙に「一國三十三番之札所／明治三十七八年 日露戦役戦歿軍人 菩提之為メ並ニ／先祖代々菩提之為メ」、背表紙に「越中國射水郡放生津中町一八八九番地／板坂与三次郎／年三十六才」とあり。一國三十三札所は、江戸期に成立していたと考えられる越中の観音霊場。

第一番霊所「大悲閣 安居寺」（7月21日）、第四番霊場「本尊千手大悲閣 朝日山」（上日寺、明治25年8月31日）、第五番「本尊千手観音 氷見町千手寺」（8月31日）、第拾壹番札所「本尊千手観世音 戸出町永安寺」（明治四拾年七月）、十四番「本尊千手観世音菩薩 射水郡橋下條村葉勝寺」（明治34年3月21日）、十三番「本尊千手観世音 金山村翁徳寺」（明治34年3月21日）、十六番「如意輪観世音菩薩 射水郡小杉町字戸破 長寿寺」（明治25年6月5日）、第十七番「本尊正観世音菩薩 小杉高寺村蓮王寺」（明治37年今日）、第拾八番「正観世音菩薩 射水郡東稻積村永久寺」（明治23年4月10日）、十九番「拾壹面観世音菩薩 殿村自運禅寺」（明治42年7月18日）、九番札所「瑞龍寺殿守本尊／如意輪観世音 高岡町繁久寺」（明治23年8月16日）、廿一番「本尊聖観音大菩薩 下村福王寺」（今日今日カ）、廿二番「正観世音菩薩 大白石村高德寺」（明治廿三年四月十日）、第七番「本尊正観世音 二上山金光院」（昭和2年9月23日カ）、新四国廿八番「本尊釋迦如来 富山縣東礪波郡出町太字太郎丸村／曹洞宗一等法地 真如院」（明治40年7月21日）の御朱印と「建曆二年正月廿三日 源空在判」の一枚起請文の写しあり。三十三番札所中、一番安居寺、五番千手寺、九番繁久寺、十一番永安寺、十三番翁徳寺、十四番葉勝寺、十六番長寿寺、十七番蓮王寺、十八番永久寺、十九番自運禅寺、二十一番福王寺、二十二番高德寺を参拝している。

⑱・⑲横川僧都の法語

縦12.0cm、横17.8cm

写したもので、2冊あり。

⑳善光寺釈迦堂世尊院リーフレット

縦17.9cm、横38.2cm、一紙・印刷（裏面なし）

「信濃國善光寺／國寶釋迦如来涅槃尊像御縁起／釋迦堂世尊院」とあり、信州善光寺釋迦堂涅槃尊像縁起が記されている。

㉑仏説十一面観世音菩薩隨願即得陀羅尼經

貼り合わせたサイズ：縦20.5cm、横60.7cm

印刷（裏面なし）。「佛説十一面観世音菩薩隨願即得陀羅尼經」。2枚にわかれており、貼り合わせていた跡あり。後ろ部分は欠損。

- (2) 平成30年度前期特別企画展「験佛化現」は、平成30年7月14日から9月2日まで開催された特別企画展で、展示の立案・構成は当時立山博物館の学芸課に在籍していた加藤基樹氏が行った。また、企画展委員であった富山考古学会の西井龍儀氏と帝塚山大学の杉崎貴英氏からご協力を賜った。
- (3) 『立山町史』上巻（立山町、昭和52年10月8日刊）、589～592頁。
- (4) 立山博物館では、寄贈後すぐに、令和2年度冬のミニ特別公開展「新発見！立山の仏さま—岩嶽寺の矢疵の阿弥陀如来立像—」（令和3年2月16日（火）～3月14日（日））に開催と題して、常設展示室の一角に特別公開展コーナーを設けて展示した。それに伴い、北日本新聞令和3年2月11日の朝刊と富山新聞令和3年2月17日の朝刊にて紹介されている。
- (5) 平成30年度前期特別企画展「験佛化現」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成30年7月14日刊）。
- (6) 加藤基樹「立山権現 [矢疵阿弥陀如来] の史的考察—立山信仰と生身仏信仰—」（『研究紀要』第24号所収、富山県 [立山博物館]、平成30年3月31日刊）。
- (7) 現在、佐伯敬之氏より銅造阿弥陀如来立像（矢疵の阿弥陀如来立像）と布地、骨3粒が寄託されている。
- (8) 『氷見市史』6・資料編四民俗、神社・寺院（氷見市史編さん委員会編、氷見市、平成12年7月刊）、337～338頁。
- (9) 細木ひとみ「コラム 氷見論田集落・立山権現講について」（平成30年度前期特別企画展「験佛化現」展示解説書所収、前掲書32頁）に平成30年2月に行われた立山権現講の写真なども掲載している。

- (10) 愛知県北名古屋市の林證寺と松林寺が所蔵する立山由来の仏像群については、平成30年度後期特別企画展・明治150年記念特別企画展「立山の明治維新一継承、そして創造」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成30年9月15日刊）でも紹介している。
- (11) 『越中宝鑑』（『日本名蹟図誌』第4編所収、渡辺市太郎編、光彰館、1898年10月刊）。
- (12) 『富山県の文化財』第一集（富山県教育委員会、1961年3月刊）で紹介されている「明治四十年十二月下旬 立山開創以来光明殿来迎寺 縁起」によると、来迎寺はもと立山の一院で千手ヶ原（千寿ヶ原）にあったといい、久寿2年（1155）林海法印が立山権現の霊夢により、婦負郡萩島村に移る。文亀2年（1502）26世乗誉大山上人の時に萩島村より富山町桑原（古寺町）へ引っ越し、慶長14年（1609）に高岡木町へ、慶長19年（1614）に再び富山古寺町に戻り、万治4年（1661）に現在地に移っているのである。
- (13) 『自他国寶物并法談願日記』（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵 [加越能文庫]、石川県指定文化財）。
- (14) 野口安嗣「立山ゆかりの寺院の出開帳」（『研究紀要』第12号所収、富山県 [立山博物館]、2005年3月31日刊）。
- (15) 『立山町史』上巻、581頁の「玉林坊 阿弥陀如来坐像」参照のこと。
- (16) 銅造阿弥陀如来立像は、旧所蔵者のご両親がお亡くなりになったことで太閤山の家が処分され、旧所蔵者が住む大阪市へと移り、令和2年11月まで大切に祀られていた。
- (17) 註（1）の③の資料。
- (18) 「板坂亦平様」宛に岩倉（岩嶽寺）実相坊より「寅九月一日」（年は不明）に出された書簡（便り）。註（1）の⑥の資料。
- (19) ただし、旧所蔵者には「板坂亦平についてはわからないが、明治2年であれば（自身の）祖父である板坂久次郎の頃ではないか」と教えていただいた。
- (20) 木倉豊信編『越中立山古文書』（株式会社図書刊行会、昭和57年6月刊）の157～159頁に読み下しが掲載されている。
- (21) 越中立山岩嶽寺古文書（富山県指定文化財）のうち。立山町文化財調査報告書第33冊『立山信仰宗教村落一岩嶽寺一石造物等調査報告書』（立山町教育委員会、平成24年3月刊、18頁）に掲載の絵図⑩で、同書には「天保年代の連年の凶作を凌いで、岩嶽寺が年貢を収納する手だてとして、宮路茂左衛門への柴山等の切売りが続いた。その状況を目代が上申した文書が越中立山岩嶽寺古文書などにのこされており、これらの附図の下絵」とある。
- (22) 越中立山岩嶽寺古文書（富山県指定文化財）のうち。立山町文化財調査報告書第33冊『立山信仰宗教村落一岩嶽寺一石造物等調査報告書』（立山町教育委員会、平成24年3月刊、19頁）に掲載の絵図⑪で、絵図⑩と同じく、「天保年代の連年の凶作を凌いで、岩嶽寺が年貢を収納する手だてとして、宮路茂左衛門への柴山等の切売りが続いた。その状況を目代が上申した文書が越中立山岩嶽寺古文書などにのこされており、これらの附図の下絵」とある。
- (23) 越中立山岩嶽寺古文書（富山県指定文化財）のうち。立山町文化財調査報告書第33冊『立山信仰宗教村落一岩嶽寺一石造物等調査報告書』（立山町教育委員会、平成24年3月刊、17頁）に掲載の絵図⑫で、慶応元年（1865）に制作されたとみられる。
- (24) 題箋に「立山参詣記」とあり、冒頭に「越中州立山参詣日記／于時天保二年辛卯六月廿日／行年二十三歳 佛山禅苗 僧／行年十六才 随童亀治郎」と記されている。佛山禅苗（禅苗禅師）は、後に昇龍山観音庵（尼寺）に身を置いており、この参詣記に佛山禅苗が獅子が鼻で決死の修行を行った際に巖窟（獅子の口の中）に持って入ったと記される「血書観音普門品」と「血書大般若理趣分」一巻、同じく巖窟に持って入って佛山禅苗が自身の左手小指を切断した血で書いた願文「五仏理趣分」が遺されている。また、佛山禅苗は昇龍山観音庵でも自らの血を用いて様々な経文や名号を血書しており、それらの遺品も今もなお同寺に伝えられている。
- (25) 射水市新湊博物館の松山充宏学芸員のご教示によると、「井波屋」は放生津新町（内川の南側）の住人という（新町の税金徴収簿に名があり）。
- (26) 註（25）に同じく、松山学芸員のご教示によると、「牧屋」は江戸末に火災で焼失した放生津八幡宮の再建工事にも町役人として関わっているとのことで、再建前後に牧屋が奉納した神酒瓶子1対が現在も放生津八幡宮に遺っているという。『放生津八幡宮祭 曳山行事・築山行事総合調査報告書』（射水市教育委員会）の添付CDを参照のこと。
- (27) 栃木県立文書館に寄託されている大島延次郎家文書については、加藤基樹「明治維新时期における立山登拝と『立山信仰』一登拝者の実態にみる民衆信仰史の一齣一」（『研究紀要』第19号所収、富山県 [立山博物館]、平成24年3月31日刊）を参照のこと。
- (28) 『立山町史』上巻（立山町、昭和52年10月8日刊）、591～592頁。
- (29) 芦嶽寺衆徒の出開帳では、芦嶽寺の嫡尊像や開山の霊像、宝物などを開帳したようである。詳細については、註（5）・（6）を参照のこと。



写真1 令和2年に寄贈された矢疵の阿弥陀如来立像（板坂家旧蔵・⑫）



写真2 令和2年に寄贈された関連資料（一部）



写真3 左胸に「矢疵」あり



写真4 佐伯敬之氏の矢疵の阿弥陀如来立像 (①)



写真5 御開帳時に掛けられた御戸帳



写真6 岩峯寺玉林坊の矢疵の阿弥陀如来坐像 (⑩)



写真7 阿弥陀如来坐像の背面（柄あり）



写真8 八尾勝福寺の矢疵の阿弥陀如来坐像 (⑪)



写真9 阿弥陀如来坐像の左胸に「矢疵」



写真10 板坂家旧蔵の阿弥陀如来立像の左側面



写真11 板坂家旧蔵の阿弥陀如来立像の像底

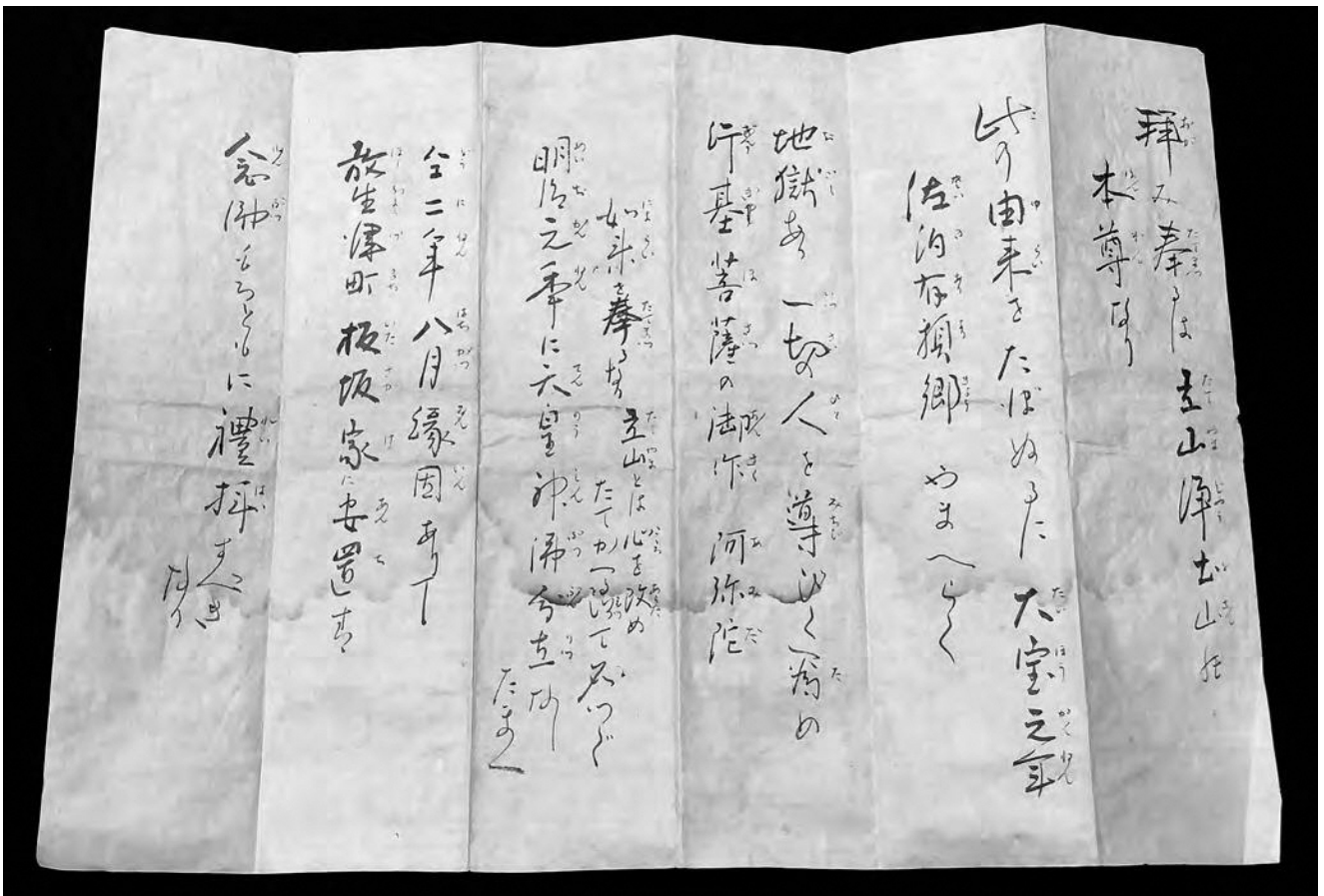


写真12 阿弥陀如来由来書

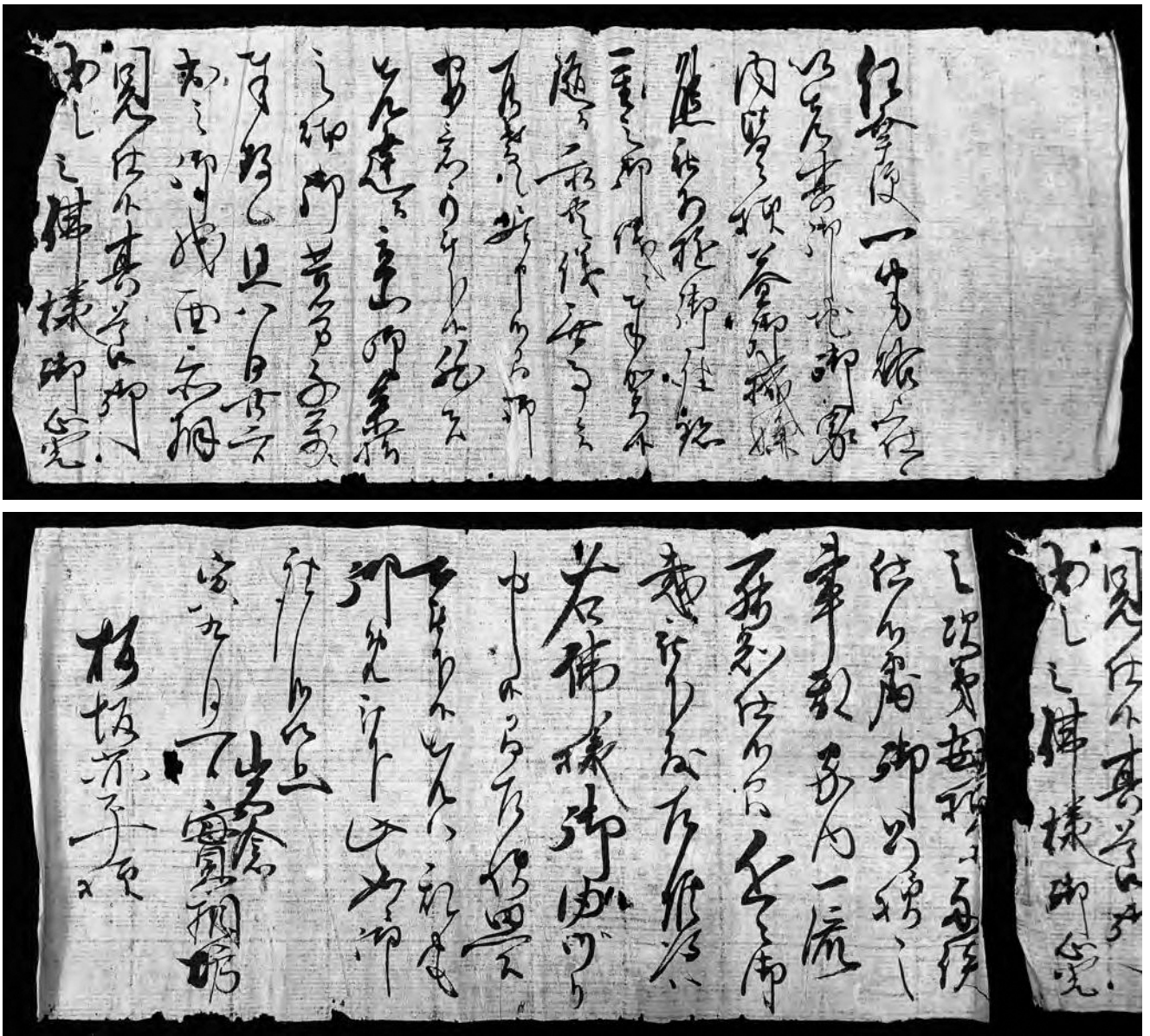


写真13 岩峯寺実相坊から板坂亦平への書簡（2枚に破れている）

表1 「矢疵」のある阿弥陀如来像一覧

	所蔵者	材質	形態	像高 (cm)	由来	備考
①	個人(千葉県)	銅造	立像	36.6	岩嶽寺永泉坊の住職が我が子の菩提を弔うために寄進。	『立山町史』上巻に掲載。富山県[立山博物館]に像と一緒に由来の記された布地(御戸帳)と骨3粒が寄託されている。
②	大宝寺(射水市)	銅造	立像	37.7	不明、廃仏毀釈により遷されたか。	『立山町史』上巻に掲載。
③	論田自治会(氷見市)	銅造	立像	33.7	岩嶽寺明星坊から明治10年に坂下甚三郎氏が譲りうけた。	『立山町史』上巻に掲載。
④	個人(富山市婦中町)	銅造	立像	26.8	寛永元年(1624)牛ヶ首用水創設時に出土。	『立山町史』上巻に掲載。
⑤	個人(富山市愛宕町)	銅造	立像	20.8	不明、廃仏毀釈により遷されたか。	『立山町史』上巻に掲載。
⑥	林證寺(愛知県北名古屋市)	銅造	立像	37.2	立山山中に安置されていた仏像群がのうちの1軀で、元浄土山本尊と伝わる。	林證寺蔵の「開帳案内」には、写真とともに「三国伝来金銅像/立山元本社本尊阿弥陀如来」と紹介されている。
⑦	見付来迎寺(富山市梅沢町)	木造	立像	62.5	立山ゆかりの寺院。見付来迎寺による出開帳に使用されたか。	
⑧	個人(富山市婦中町カ)	銅造	立像	未見	不明	『立山町史』上巻に掲載。
⑨	個人(上市町カ)	銅造	立像	未見	不明	『立山町史』上巻に掲載。
⑩	個人(立山町)	銅造	坐像	20.2	岩嶽寺玉林坊に伝来。「もとは懸仏(御正体)であった」と記されるが書き間違いか。	『立山町史』上巻に掲載。
⑪	勝福寺(富山市八尾町)	木造	坐像	52.0	平成11年(1999)ごろに高岡の旧家から勝福寺に安置された。	北日本新聞社の平成11年6月19日朝刊の記事より。
⑫	富山県[立山博物館]	銅造	立像	37.2	岩嶽寺の宿坊家(岩嶽寺実相坊と推測)から明治2年に放生津の板坂家が譲りうけた。	「阿弥陀如来由来書」によると元浄土山の本尊という。

(2023年3月現在)